

赤瀬川原平の「超芸術」―「トマソン」という転換点

長尾萌佳（九州大学）

赤瀬川原平（1937-2014）は、1960 年代、反芸術的美術動向の担い手として活躍したが、1970 年代以降は、主流的な美術の世界からは距離を置き、漫画や小説、エッセイなど幅広い領域にわたって創作活動を展開した人物として知られる。これまで、ハイレッド・センターや《模型千円札裁判》など、60 年代の前衛美術の活動については度々論じられてきたが、それ以後の彼の活動については美術の文脈で十分に検証されてきたとはいえない状況である。そこで、本発表では、80 年代に行われた「トマソン」に焦点を当て、美術家としての赤瀬川原平像を更新し、戦後美術史を見直すことを目指す。

赤瀬川は 1982 年、雑誌の連載の中で、「超芸術トマソン」というコンセプトを発表し、主に雑誌や書籍といった活字媒体を利用して様々な活動を行った。「トマソン」とは、上った先にあるべきはずの扉がない階段や、半端な丈で切断された電柱、取り壊された隣家のシルエットが刻まれた壁など、街中に見られる実用的な用途を持たぬまま存在している建造物やその一部を指す言葉として、赤瀬川が命名したものである。それらは「芸術」を超えた「超芸術」であると謳われた。「トマソン」は写真とテキストによって提示されたが、赤瀬川はそれらを自らの「作品」として発表するのではなく、雑誌の連載で読者投稿を募り、趣味的な遊びとして世に広めた。

「トマソン」は当時、美術の文脈で語られることはほとんどなかったが、近年では赤瀬川の活動の根底には一貫して「芸術」についての問題意識があることが指摘され、トマソンもコンセプチュアルな「作品」として再評価されつつある。とはいえ、それがどのように連続性を持つのか、十分に語られているとはいえない。

本発表では、まず先行研究をもとに、トマソンの活動の全体像を整理する。トマソンは赤瀬川の手を離れ、様々な人々の手によって展開していったが、赤瀬川の意図によって行われた、いわば「作品」としての核をなす部分をつかむとともに、活字媒体の利用や読者の動員といった手法を作品の形式としてとらえる。

次に「トマソン」や「超芸術」というコンセプトについて、「芸術」概念についての思索を生涯にわたりテーマとしてきた赤瀬川の文脈の中から考察する。そこから、トマソンの活動が、60 年代の「反芸術」的活動から断絶したものではなく、それ以前の活動を引き継ぎつつ、新たに展開させる転換点であったことを示す。